令和４年度企画展

土器サミット in 今治
～古墳時代初頭にやってきた土器たち～

【展示期間】令和４年８月 19 日～令和４年 12 月 11 日

はじめに

今治市ではこれまで多くの市内遺跡の発掘をおこなってきました。今回の展示はその中でも他地域からやってきた外来系（がいらいけい）土器に注目した展示となっています。

地域ごとに特有の土器があり、土器の違いは方言に例えられることがあるほどです。古墳時代初めという時代は各地域の人々が個性的な土器やその技術を携（たずさ）え移動する時代です。今回の展示では個性豊かな外来系土器を今治に集った土器たちのサミット風に紹介します。

時期の呼称

古墳時代初頭（しょとう）から前期前半（ぜんきぜんはん）は大まかに２・３世紀に当たります。古墳時代初頭は弥生時代終末期（やよいじだいしゅうまつき）と呼ばれることもありますが、今回の展示では古墳時代初頭という呼称を採用しています。

各地域代表の土器

土器サミット開幕!!

今治の土器代表

土器サミット司会は私、今治の土器が務(つと)めるけんね。各地域からおこしの土器のみなさんに自己紹介をお願いする前に、私自身を紹介しよわい。

私は今治在地の甕(かめ)やけん。胴長な体型で、粗い刻(きざ)みが入った叩(たた)き板で叩きながら形を整えられた跡が特徴なんよ。

それでは皆さん、自己紹介を頼まいねー。

粗い叩き目

叩き調整イメージ

畿内系土器代表

僕は畿内(きない)系(1)の甕やで。形は丸みがあって底はとんがり気味の丸底になってんねん。頸(くび)から口にかけてはシャープに折れ曲がっとって、口の部分の上端がちょっと摘(つま)み上げられてんのがチャームポイントやで。内側が薄なるように削られとって、厚みは大体２mmくらいやねん。細かい刻みのはいった叩き板で叩いて整形されてるんも特徴なんやで。

細かい叩き目

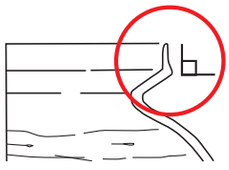
摘み上げられた口の端部

補足

（１）今回、畿内系土器の代表としたのは、河内型庄内式(かわちがたしょうないしき)と呼ばれる甕で、畿内から持ち込まれたと考えられる搬入品(はんにゅうひん)です。

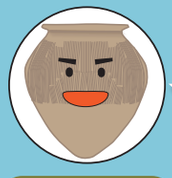
吉備系土器代表

わしゃあ吉備系の甕じゃ。口んとこが二段になっとって、外に開いた一段目から二段目が直立しとんが一番の特徴なんじゃ。二段目には櫛描文ってゆう、よーさんの横線で飾っとる。まりぃ形しとって、畿内ほど薄ぅはねぇけど、でぇーれぇー薄ぃんじゃ。



口の部分の断面形

口の部分の櫛描文



讃岐系土器代表

僕は讃岐系の甕やで。下川津 B 類土器[2]と呼ばれる甕で、短く折れ曲がった口の部分と肩が張るような形が特徴なんよ。材料の粘土に特に角閃石がよおけ入っとって、内面が削られて薄く仕上げられとるんやで。

土器上半の調整：刷毛目

土器下半の調整：ヘラ磨き

東阿波系土器代表

僕は東阿波系[3]の二重口縁壺っていうんじょ。徳島県の吉野川流域に多い結晶片岩の粒を材料の粘土中に含んどることが大きな特徴なんよ。口の部分には凹線風の横ナデもみられるんじょー。

凹線風の横ナデ

山陰系土器代表

わたしは山陰系の器台だけん。底が丸い壺なんかをのせるのに使われちょったよ。横から見た形が楽器の鼓に似ちょうけん、鼓形器台と呼ばれちょーわ。

土器がのせられた鼓形器台

楽器の鼓

補足

（2）下川津 B 類土器は伝統的な技法を色濃く残すことが特徴です。甕の場合、弥生時代後期前葉には見られなくなる土器下半に施すヘラ磨きの伝統を維持しています。

（3）今治で見つかっている、東阿波系土器はこの１例だけで、形は東阿波では決して主流のものではありませんが、各地への搬出が確認されているようです。

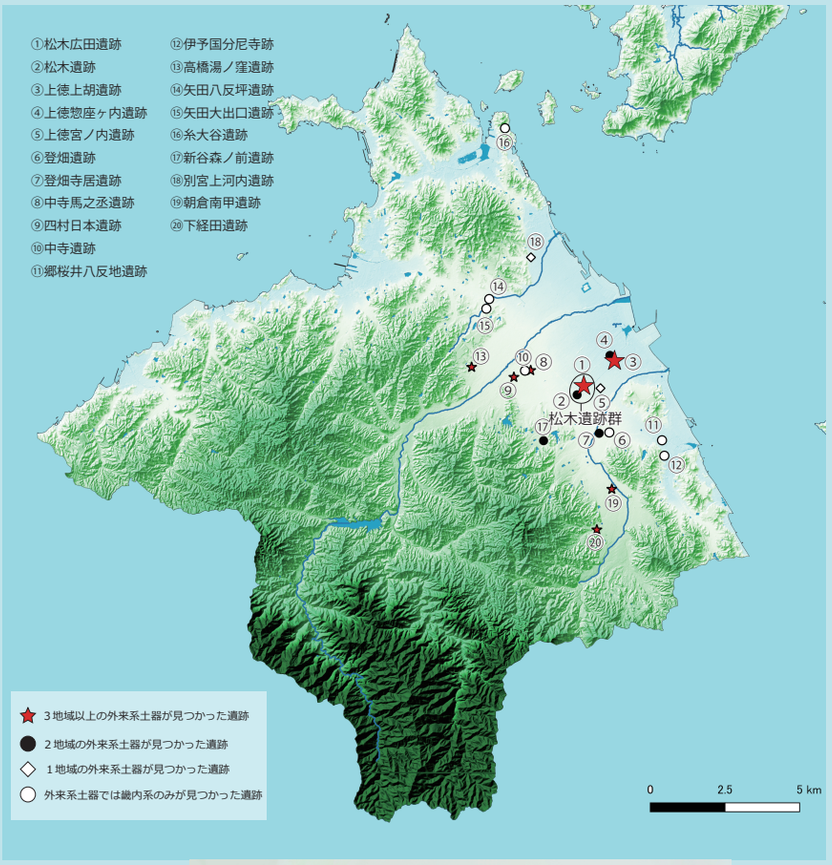
今治の土器代表

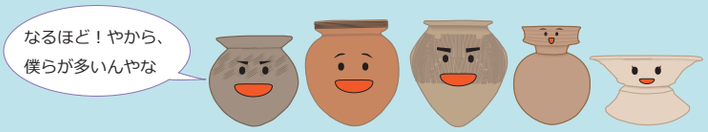
各地域の土器代表のみなさん、ありがとうね。ほやけど、なんで、いろんな地域の土器が今治にあるんやろか？下の解説をみてみとん。

今治の交流拠点

頓田川左岸の舌状の微高地上には松木広田遺跡をはじめとする松木遺跡群が広がっています。松木広田遺跡では畿内、吉備、讃岐、東阿波系土器が見つかっており、甕では約４割を外来系土器が占めます。また、松木広田遺跡よりも海岸よりに位置する上徳上胡遺跡では甕の約 7 割が外来系です。通常の遺跡では多くとも外来系土器は 1 割未満であるのに比較すると、両遺跡の状況は特異といえます。松木遺跡群が拠点的集落、現在よりも内陸にあった当時の海岸線により近い上徳上胡遺跡が交流の玄関口となる港湾性集落であったことが想定されます。

古墳時代初頭の今治には交流拠点となる松木遺跡群、交流の玄関口となる上徳上胡遺跡があったため、これらの集落に他地域の人々が移動したり、定着したと考えられます。そのため今治では多くの外来系土器がみつかっています。





松木広田遺跡・上徳上胡遺跡の外来系土器

おわりに

今回の展示では擬人化した土器に、サミット風に解説してもらいましたが、土器が意思をもってひとりでにやってくることは決してありません。今治で他地域の土器が発見されているという事実の背後にある実体は今から 1700 年以上前の人々の移動と交流です。今治に他地域の土器があるということは、当時の人々が手漕ぎの船や自らの足で各地から今治へやってきたり、今治から各地へ赴いたりしたことを物語っています。

別紙 1

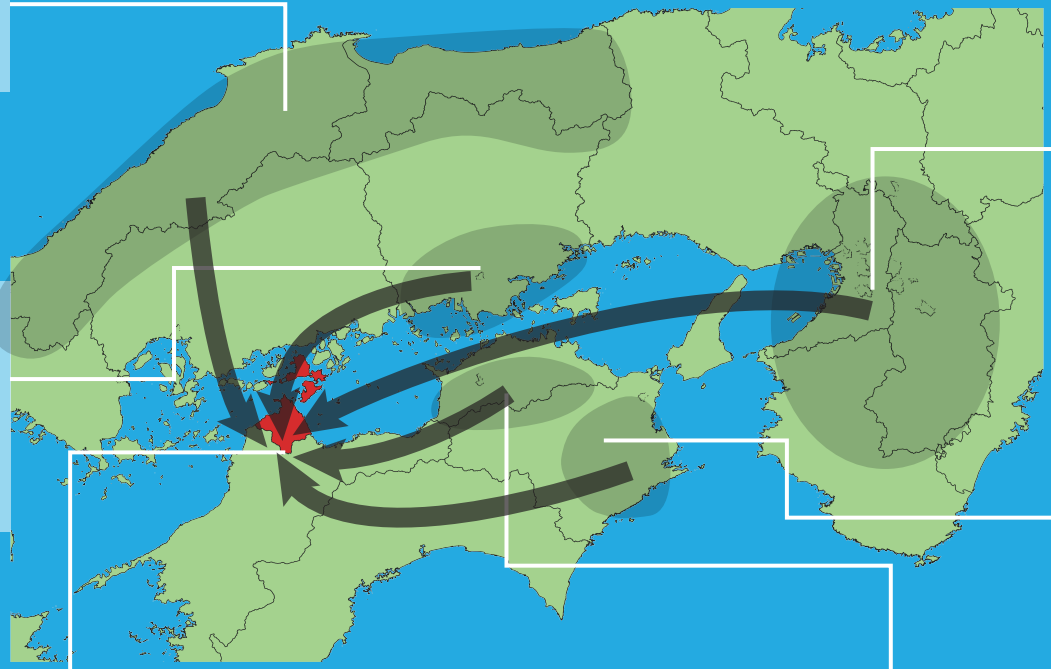
各地域代表の土器

山陰系土器代表

山陰系の器台で鼓のような形をしており、鼓形器台と呼ばれる。
他の器種：大型鉢、壺
出土遺跡：上徳上胡遺跡、上徳惣座ヶ内遺跡、下経田遺跡など

吉備系土器代表

吉備（現在の岡山県）に特有の甕で直立した口の部分が特徴。愛称は「ボウフラ」。
出土遺跡：上徳上胡遺跡、松木広田遺跡、下経田遺跡など



畿内系土器代表

畿内系（現在の大阪府、奈良県）の甕で搬入品と考えられる。細かい叩き目、シャープに屈曲した口縁部が特徴。
他の器種：加飾壺
出土遺跡：松木広田遺跡

東阿波系土器代表

東阿波（現在の徳島県東部）系の二重口縁壺。材料の粘土中に吉野川流域に多い結晶片岩を含んでいることが特徴。
出土遺跡：松木広田遺跡

今治の土器代表

今治在地の甕。長胴な形と粗い叩き目が特徴。
他の器種：器台・複合口縁壺
出土遺跡：松木広田遺跡、別宮上河内遺跡など

讃岐系土器代表

讃岐（現在の香川県）特有の下川津 B 類土器と呼ばれる甕で、肩が張った形をしているのが特徴。
出土遺跡：松木広田遺跡、上徳宮之内遺跡